

はしがき

中国は12の経済指標で既に米国を追い抜き、2025年までに更に9の指標で米国を抜き世界一になる、と英国エコノミスト誌が報じた(図1参照)。ここで使われている指標を見ると、世界一の鉄鋼消費量、世界一の自動車販売、世界一のGDP……とほとんど総て量的指標でありニュースとは言い難い。質的指標で見れば、世界銀行指標で中国は一人当たりGDP世界80位(2012年一人当たりGDP)、千人当たり自動車保有数では世界80カ国中68位(2011年)である。中米の人口比4.5で量的指標を割ってやれば質的指標が算出でき、中国が米国に追いつくのはマダマダという落ちになる。

中国政府は量的指標、質的双方の指標を基に図2のような「3段階6化」の長期経済計画を立てている。第1段階＝2020年までに世界の60位に。第2段階＝2040年までに世界の40位に。第3段階＝2080年までに世界の20位に。そして、「6化」とは経済、社会、政治、文化、生態、ヒトの現代化である。

しかしながら、量的・質的モノサシで平均的な中国像を描いて、これこそ中国だ、と思ったら大間違いである。「地博物多」。古来、中国自身が一つの世界なのである。チベットから北京まで、貴州から上海まで、黒龍江から広東まで、山東から新疆まで。風土も、歴史も、経済も、社会も、文化も、ヒトも、コトバも一律ではなく多彩、不均等で社会発展レベルを異にしている。31省・市・自治区は自給自足的な独立王国の特徴を色濃く帯びている。われわれは、エコノミスト誌がやったごとく、中国という世界の中の31省・市・自治区で、人口、GDP、一人当たりGDP、千人当たり自動車保有数など歴年の経済指標を用いて激動の軌跡をたどり、将来の予測を描くことができる。個別具体的な特徴を持った省レベル経済単位から、改めて中国という国を見直してみようではないか。

本書は、中国という国家を構成する1級行政単位である31の省・市・自治区経済のガイドブックである。21世紀中国総研の「一目でわかる」シリーズの一冊であり、経済の統計数値を「見える化」することに努めた。コンストラクションは、マクロ経済を骨太にとらえ、中国人の生活をセンシティブに把握し、対中ビジネス展望に役立てたいという願いから立案されている。本書のベースになった経済指標データは、コピー・ペーストして、読者自身の目的に沿った形にカスタマイズするのが望ましいという考えから、本書とは別に電子版を別途リリースすることにした(詳しくは巻末参照)。

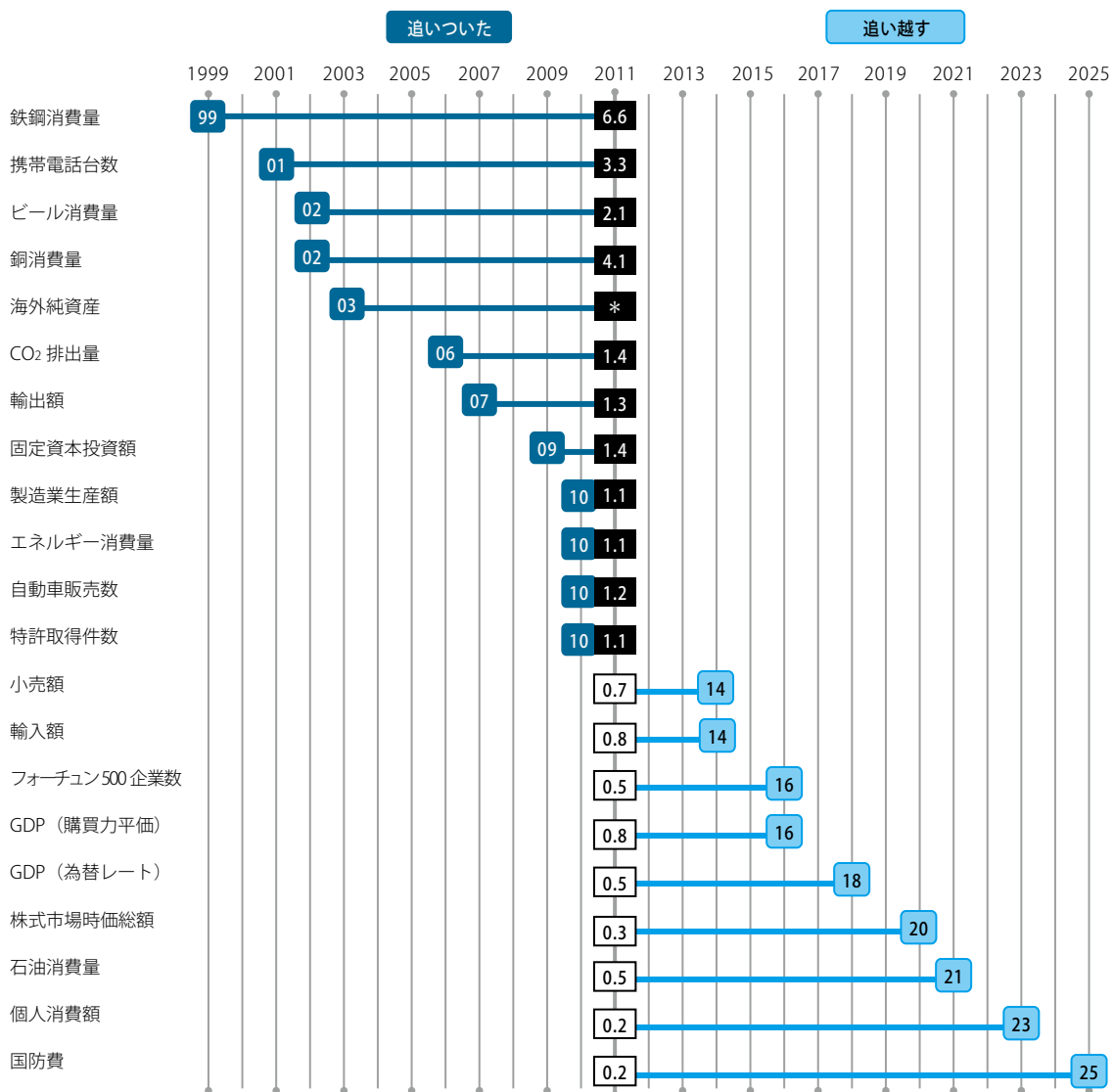
本書の編集に参加した21世紀中国総研のメンバーは以下のとおりである。

田中典子、阿部真紀子、姜成山、孫丹桜、金哲敏。

2014年8月28日

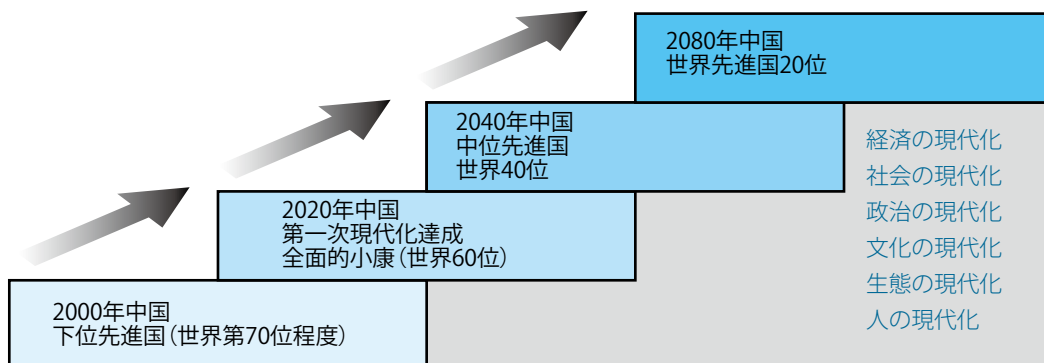
株式会社蒼蒼社兼21世紀中国総研事務局長 中村公省

図1 中国は米国に追いつき、追い越す（米国＝1とする中国の比重の実績と予測）



* 中国は \$2trn、米国は \$2.5trn。(出所) The Economist online, Aug. 25, 2014

図2 中国「3段階6化」の長期発展計画



(出所) 中国発展門戸網